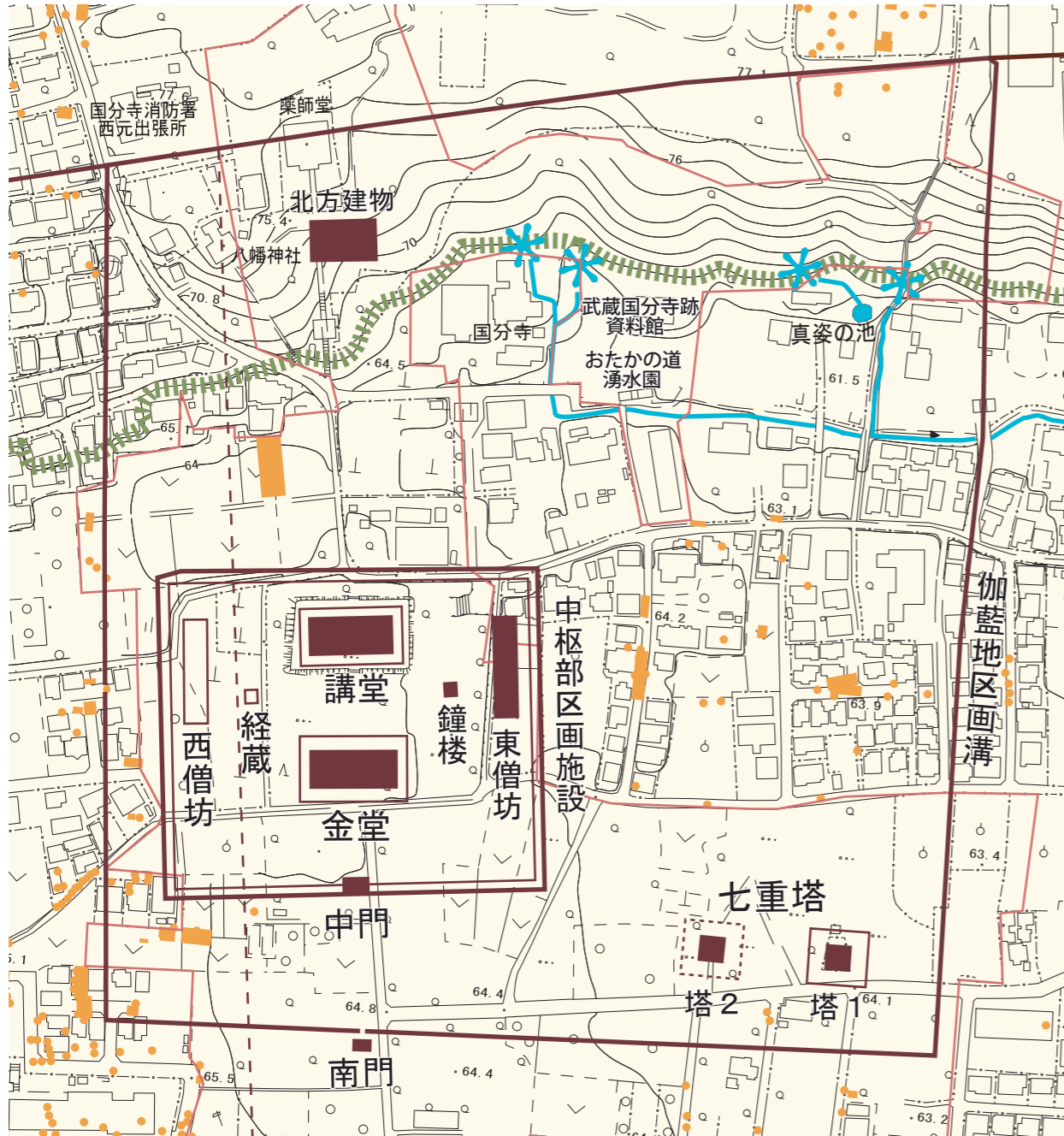


国指定史跡

武蔵国分寺跡

— 近年の僧寺伽藍の発掘調査 —



武蔵国分寺の歴史

武蔵国分寺は、天平13年(741)に聖武天皇により発布された国分寺建立の詔で、鎮護国家を祈念して全国に60余り設置された国分寺の一つです。当時の文献資料からは、承和2年(835)に伽藍を構成していた堂宇の一つである七重塔が雷火によって焼け、その10年後の承和12年(845)に男衾郡の前大領壬生吉志福正が再建を願い出て許可されたことが『続日本後紀』に記されています。それ以外には、国分寺の造営をめぐる具体的な過程は明らかではありませんが、発掘成果では出土瓦の様相などから武蔵国分寺は天平宝字年間(757~765)頃の創建と考えられています。

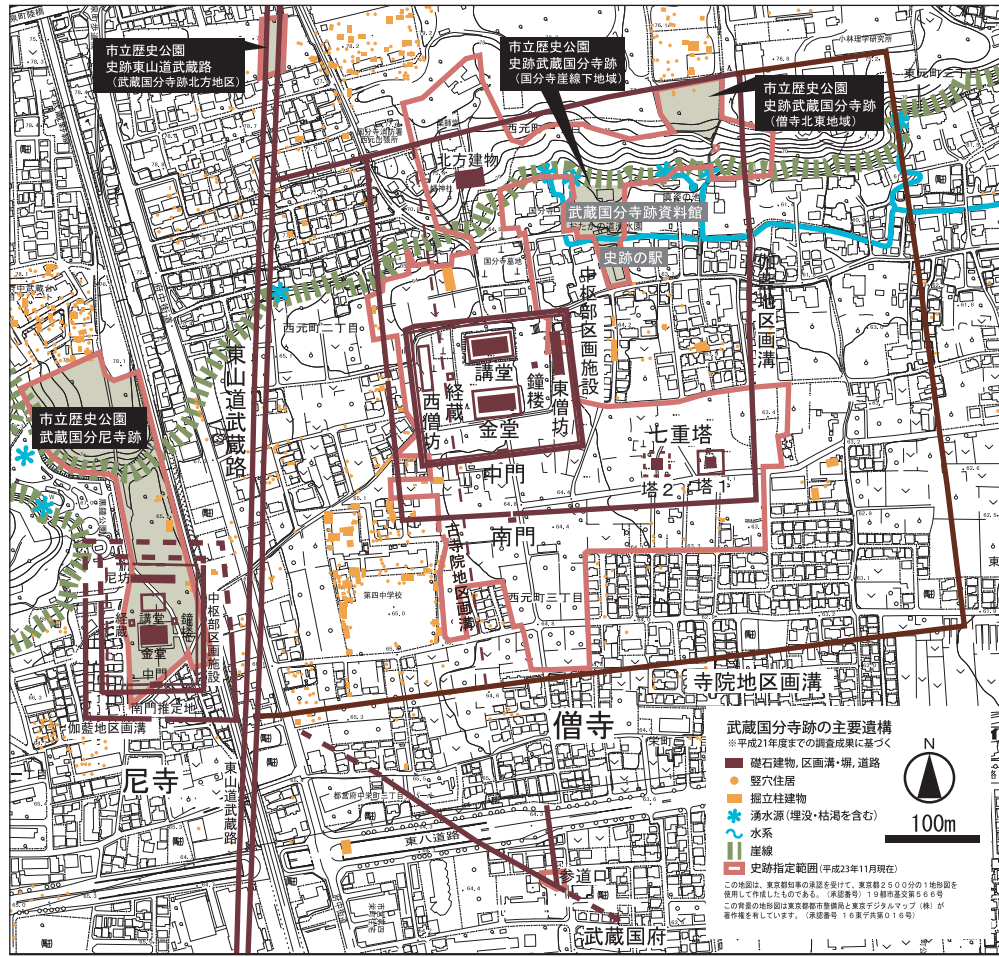
古代寺院としての武蔵国分寺の終焉については、発掘調査では10世紀前半頃には寺域区画溝の埋没後、区画の内側に竪穴住居が出現することから、徐々に衰退に向かっていった様子が窺えますが、『小右記』には治安3年(1023)に国分寺修造の宣旨が下されたことが記されています。また、宗教法人国分寺所蔵の『医王山縁起』は、元弘3年(1333)、新田義貞と鎌倉幕府との間で行われた分倍河原の合戦において国分寺が焼失し、建武2年(1335)に義貞の寄進で再興されたことを伝えています。



武蔵国の諸郡

時代	年号	西暦	主な出来事
飛鳥	大化元	645	○大化改新 東国に国司を派遣
	天武朝	—	○この頃、五畿七道がほぼ成立し、武蔵国は東山道に属す
	持統朝	—	○この頃、武蔵国の国府が現在の府中市におかれる
奈良	和銅3	710	○平城京に遷都
	天平9	737	○国ごとに釈迦仏像一体・挟侍菩薩二体を造り、大般若経一部六百巻を写させる ○疫病(天然痘)が大流行し、多数の死者がでる ○藤原四兄弟(武智麻呂・房前・宇合・麻呂)、天然痘のために相次いで死亡する
	天平12	740	○国ごとに法華経十部を写し、七重塔を建てさせる
	天平13	741	○国分寺建立の詔を発布する
	天平15	743	○盧舎那大仏鑄造の詔を発布
	天平16	744	○国ごとに正税四万束を割き、毎年出挙して国分寺造営の費用に充てる
	天平19	747	○国分寺造営について国司の怠情を責め、郡司を専任として重用し、三年以内の完了を命じる
	天平勝宝4	752	○東大寺大仏開眼法会がおこなわれる
	天平勝宝8	756	○聖武太上天皇崩御 ○聖武太上天皇一周忌齋会のため、使を諸国に遣わし、国分寺の丈六仏像の造仏、さらに造仏殿、造塔を促す
	天平宝字元	757	○この頃、武蔵国分寺の主要な建物が完成する
	天平宝字2	758	○武蔵国に新羅郡を置く
	天平宝字5	761	○諸国国分尼寺に阿彌陀仏丈六像一体・脇侍菩薩像を二体造らせる
	天平神護2	766	○諸国に朽損、傾斜した国分寺の塔・金堂の修理を命じる
	宝龜2	771	○武蔵国、東山道より東海道に転属する
延暦3	784	○長岡京に遷都	
延暦13	794	○平安京に遷都	
弘仁9	818	○関東で大地震おこり、相模・武蔵・下総・常陸・上野・下野等で被災、特に上野国で被害甚大	
承和4	837	○疫病流行により諸国の国分寺に昼は金剛般若経を読ませ、夜は薬師悔過を行わせる	
承和6	839	○相模・武蔵等関東七国(国分寺)に一切経一部を写させる	
承和2	835	○武蔵国分寺の七重塔、神火(落雷)で焼失する	
承和12	845	○武蔵国前男衾郡大領外従八位上壬生吉志福正が、承和2年(835)に神火(落雷)で焼けた武蔵国分寺七重塔の再建を願い出て許可される	
承和14	847	○武蔵国分寺中院の僧最安、一切経を書写(法隆寺蔵大菩薩藏経卷十三奥書)	
仁寿3	853	○武蔵・信濃両国(国分寺)に一切経一部を写させる	
貞觀元	859	○諸国に命じ諸寺の堂塔を修理させる	
貞觀13	871	○諸国国分寺に一万三千画像一鋪(広六幅、高一丈六尺)を設置させる	
貞觀15	873	○陸奥国、蛮夷平定のため武蔵国の例に準じ、五大菩薩像を造り国分寺に安置させる	
元慶2	878	○関東に大地震おこり、とくに相模・武蔵の被害甚大	
延喜5	927	○武蔵国、正税に四十万束、国分寺料に五万束を充てる	
天慶2	939	○諸国国分二寺の堂塔・仏像などに大破、汚損するもの多く、官符を下し修理させる ○兵乱と炎旱のための折雨を諸国の明神・国分寺・定額寺に祈禱読経させる	
治安3	1023	○武蔵国分寺を修造する	
長元3	1030	○疾疫除去のため、諸国国分寺に丈六観音像一体・観世音経百巻を安置させる	
文治2	1186	○源頼朝、諸国の惣社・国分二寺の修造を命じる ○この頃(平安時代末)、木造薬師如来坐像(国分寺薬師堂)が製作される	
鎌倉	建久3	1192	○源頼朝が鎌倉に幕府を開く
	建久5	1194	○源頼朝が近国の一宮・国分寺の修造を命じる
南北朝	元弘3	1333	○鎌倉幕府滅亡する ○分倍河原の合戦の戦乱に巻き込まれ、武蔵国分寺が焼失する
	建武元	1334	○新田義貞が武蔵国分寺に黄金三百両・伽羅二百目などを寄進する
	建武2	1335	○新田義貞の寄進により、武蔵国分寺薬師堂再興

武蔵国分寺の概要



武蔵国分寺の構造は、僧尼寺を含む南辺の南北中軸線上の僧寺金堂に設計の中心を置き、中央部を占める僧寺が寺院地・伽藍地(寺域)・中枢部の三重に、南西隅を占める尼寺が伽藍地(寺域)・中枢部の二重にそれぞれ溝で区画されています。また、これらの周辺に集落が分布する寺地の範囲を含めると、東西1.5km、南北1.0kmの規模に及びます。

僧寺伽藍配置は、南辺の西寄り3分の1等分線の中軸線として、伽藍地区画に設けた南門、中枢部区画に設けた中門、中枢部区画内南側の金堂、その背後の講堂、中枢部区画外の北方建物が一直線に並び、金堂・講堂の両側には鐘楼・経蔵と東西僧坊が配されます。中枢部を区画する施設は、塀と素掘り溝で構成され、中門より両翼に延びて北に折れ、東西僧坊を取り込み、講堂の背後で閉じます。塔は中枢部区画の外に位置し、伽藍地区画の南東隅に位置します。

尼寺伽藍配置は、東西二等分線の中軸線とし、伽藍地(寺地)区画に設けた南門(未確認)、中枢部区画に設けた中門、中枢部区画内南側の金堂、その背後の講堂(未確認)、尼坊が一直線に並ぶプランであったと考えられます。中枢部を区画する施設は、塀と素掘り溝で構成され、中門より両翼に延びて北に折れ、尼坊の背後で閉じます。

その他、寺の管理運営機関である「院・所」を構成する遺構群があり、政所院・太衆院、苑院、花園院、修理院等の付属諸院の存在が考えられます。

創建期(第Ⅰ期)は8世紀中～後半代にあたり、天平13年(741)の国分寺建立詔發布直後に塔周辺を中心とする伽藍地で造営に着手したⅠa期、天平19年(747)の郡司層の協力要請を受けての造寺計画の変更と造営が終了するⅠb期(天平宝字2年(758)以前)、以降のⅠc期に小区分されます。整備拡充期(第Ⅱ期)は、承和12年(845)年の塔再建と僧尼寺の9世紀中～後半代にあたります。衰退期(第Ⅲ期)は、10～11世紀代で、寺院地区画溝が埋没する時期(Ⅲa期)、伽藍地区画溝が埋没と伽藍地へ竪穴住居が建てられる時期(Ⅲb期)に小区分されます。

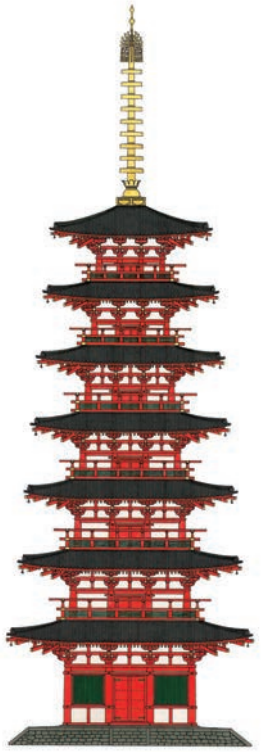
二つの塔の謎

七重塔跡は、「紫紙金字金光明最勝王經」を安置する建物。基壇の高まりとともに、礎石7個が残存している塔跡1と、その西方約50mに約11m四方、深さ2.3m以上の精緻な掘込地業を伴う塔跡2の二つの塔が確認されています。

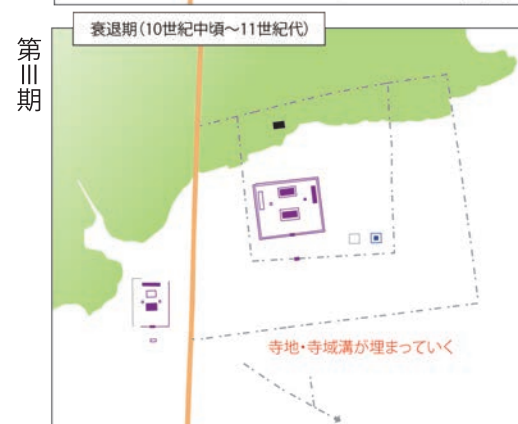
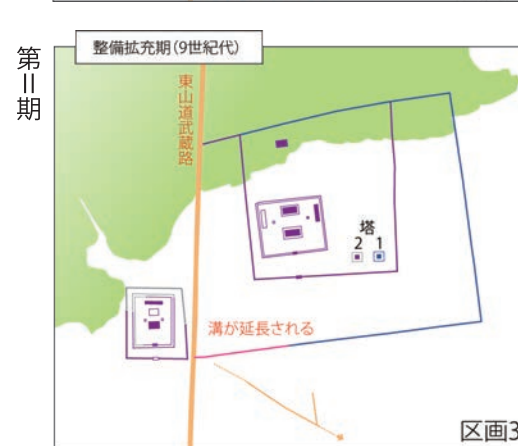
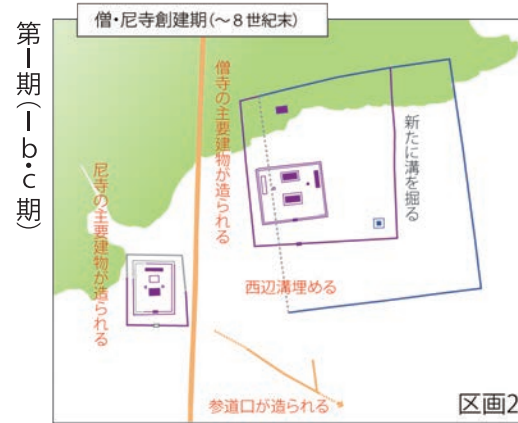
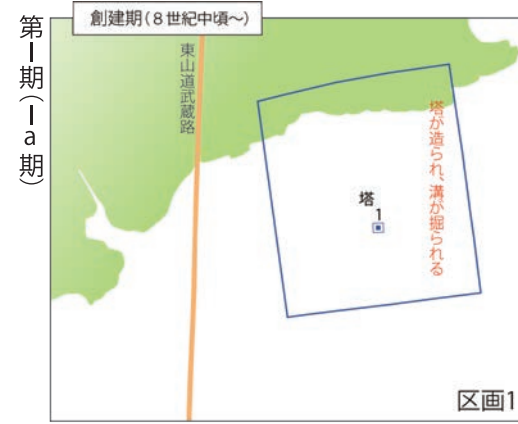
塔跡1は、創建塔として建立され、火災を受けた後に再建され、武蔵国分寺の最終段階まで存続したことは明らかとなりました。建物は創建と再建ともに、同位置において建てられており、三間(約10m)四方の礎石建物と判明しています。基壇は版築により構築され、約18m四方です。基壇外装は乱石積。外周には雨落石敷が巡っています。

塔跡2は、建物基礎の版築内から出土する土器から造作の時期が9世紀中頃と想定されます。建物基礎は、塔跡1と同等の建物が建つような規模と構造を有していますが、礎石や基壇外装の部材が残っていないことや屋根瓦の出土量が少ないことから、未建設の可能性もあります。

『続日本後紀』の承和12(845)年三月己巳条に、武蔵国男衾郡前大領壬生吉志福正が、承和2(835)年に落雷で焼けた七重塔の再建を願い出て許可されたことが記されています。この記事にみる火災を受けた七重塔は、塔跡1と考えられますが、再建を許され着手した塔が塔跡1か塔跡2か明確ではありません。塔跡1の再建と塔跡2が築造される9世紀中頃～後半の造営過程やその歴史的背景については今後とも検討する必要があります。



七重塔復元図



塔跡1全景 西から



塔跡2全景 西から



昭和39年度調査 塔跡1 南西から



建物基礎版築断面 (左:塔跡1・右:塔跡2)

金堂跡

本尊仏を安置する建物。基壇の高まりとともに、礎石19個が原位置に残存しています。発掘調査により、桁行七間(約36.1m)、梁行四間(約16.6m)の東西棟礎石建物と判明しています。基壇は版築により構築され、東西約45.4m、南北約26.2m。基壇外装は乱石積。南面中央に三間(推定)、北面中央に一間の階段を設け、外周には雨落石敷が巡っています。

出土した宇瓦(9世紀中～後半)に、建物に塗る朱が付着しており、補修状況が窺えます。



金堂跡全景 上が北



礎石 北西から



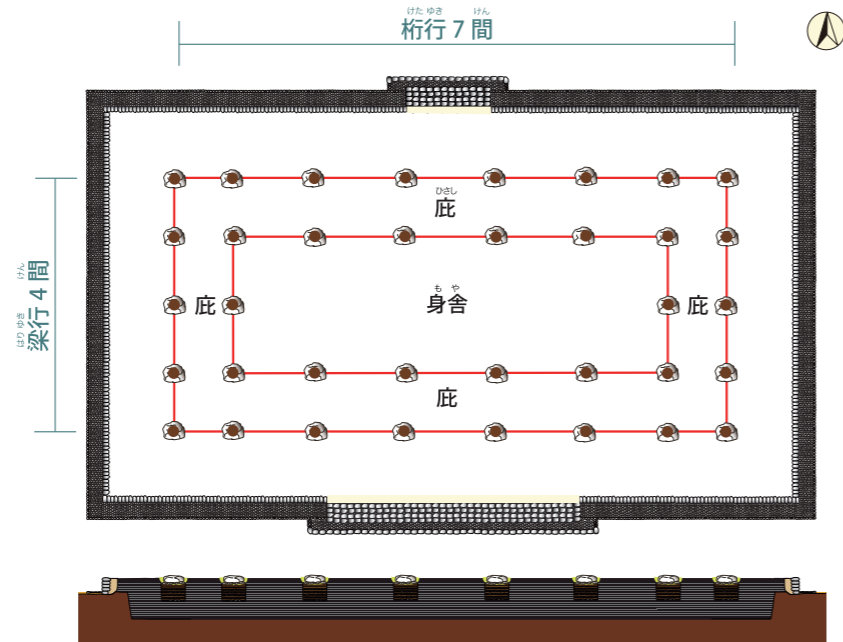
建物基礎版築断面 西から



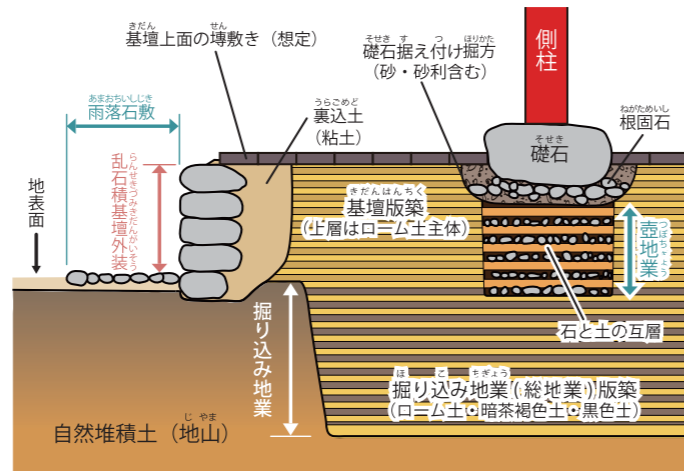
乱石積基壇外装 北東から



北面階段・基壇外装・雨落石敷 南東から



金堂基壇・建物平面模式図および基壇断面模式図



建物基礎断面模式図

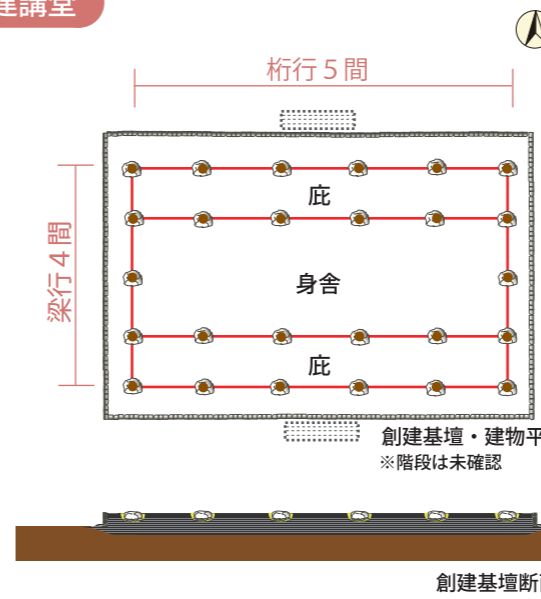
講堂跡

經典の講義などが行われる建物。基壇の高まりとともに、礎石5個が原位置に残存しています。発掘調査により、建物は、創建と再建の二回建てられており、創建期の建物は桁行五間(約28.5m)、梁行四間(約16.6m)の東西棟礎石建物と判明しています。基壇は版築により構築され、東西約34.4m、南北約22.6m。再建期は建物の間口を七間(約36.1m)に広げ、基壇の東西を約42.2mに増築しています。基壇外装は瓦積。南面、北面とも中央に一間の階段が設けられたと想定されます。

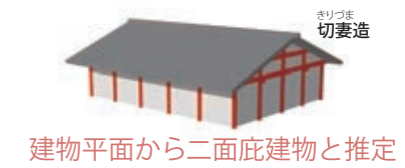


再建講堂 瓦積基壇 北から

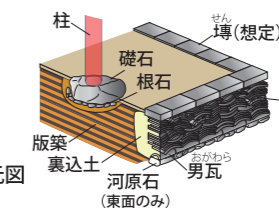
創建講堂



創建基壇断面復元図



建物平面から二面庇建物と推定



瓦積の基壇外装 (東面は河原石による地覆)



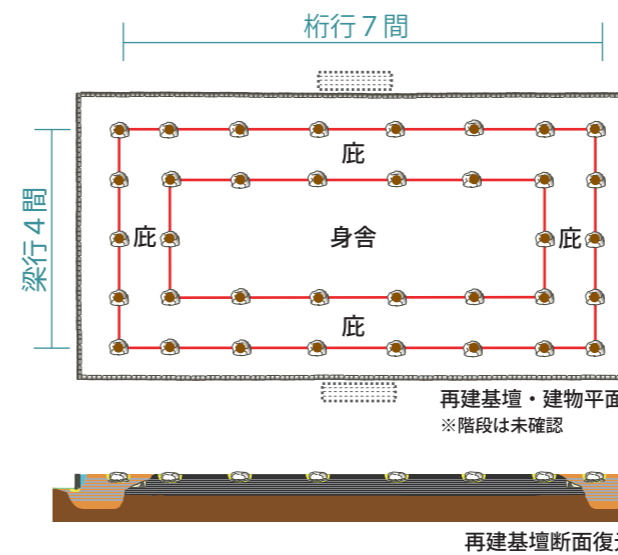
再建講堂 礎石 東から



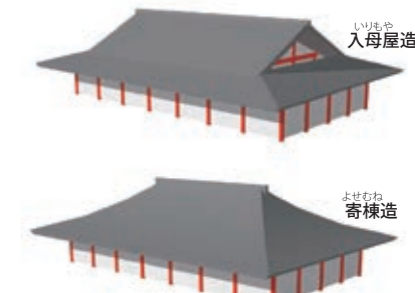
講堂跡西側調査状況 北から

9世紀後半に再建

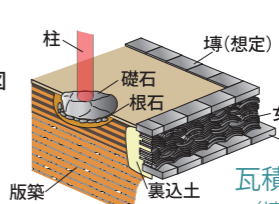
再建講堂



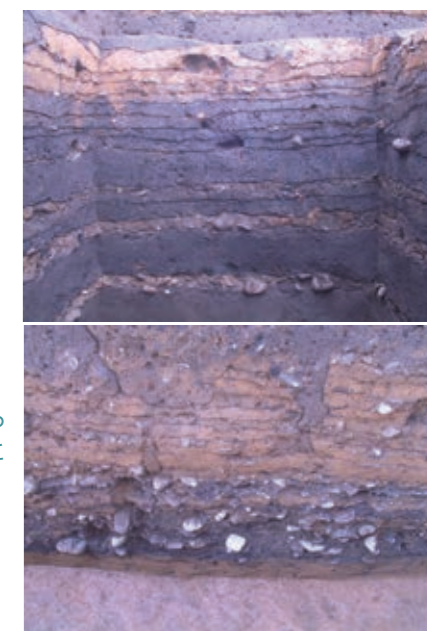
再建基壇断面復元図



建物平面から四面庇建物と推定



瓦積の基壇外装 (塼による地覆)



建物基礎版築断面 (上:創建・下:再建)

鐘楼跡

時を告げる梵鐘ぼんしゅうを吊った建物(推定)。礎石1個が残存。発掘調査により、桁行三間(約9.3m)、梁行二間(約6m)の南北棟礎石建物と判明しています。



建物基礎版築断面 東から



鐘楼跡全景 上から



鐘楼跡 南から



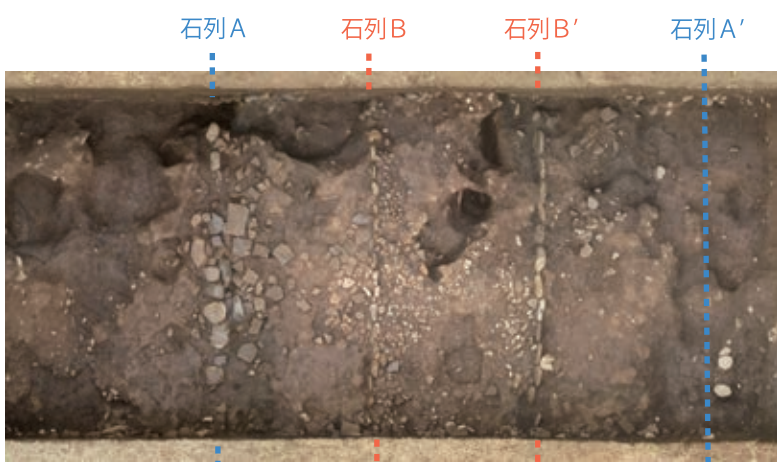
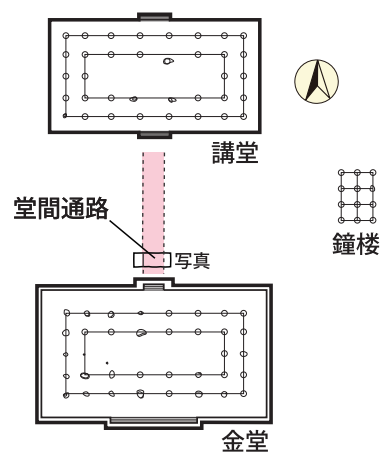
礎石 南から



基壇南縁石列 南から

堂間通路

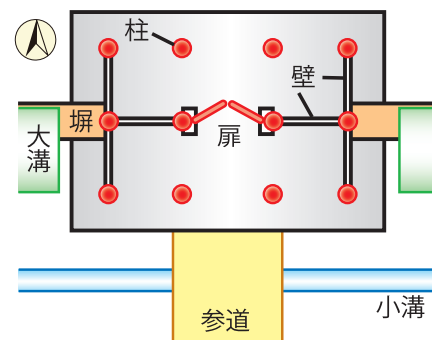
僧寺伽藍中軸線上に位置し、金堂と講堂を結ぶ南北の通路状遺構。石列を伴い、路面は礫・瓦片が敷かれています。幅は約4.3mを測り、金堂北面階段の幅とほぼ一致します。



堂間通路 上から

中門跡

中枢部区画の中軸線上に取り付けられた門。発掘調査により、基壇を有する桁行三間(約9.6m)、梁行二間(約6.0m)の東西棟礎石建物(八脚門)と判明しています。出土した4点の隅切り瓦から、屋根構造は寄棟または入母屋であった可能性が示唆されます。



中門の平面模式図



中門跡全景 上が南



壺掘地業版築断面 南から



壺掘地業内瓦敷 南から

中枢部区画施設

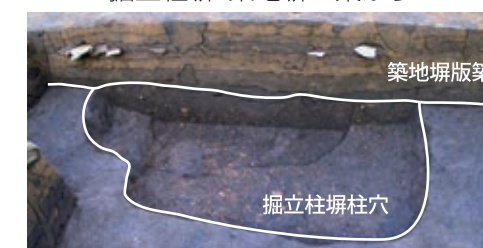
金堂、講堂、鐘楼、経蔵、東西両僧坊を囲んで区画する施設は、堀と外側の溝(二重)からなり、南側中央に中門が位置します。発掘調査により、堀は掘立柱堀から築地堀に改築されたことが判明しています。また、金堂から講堂の中軸線上に堂間通路、金堂・講堂の南側には幢竿遺構も存在し、この区画内は、宗教儀礼を行う空間としての機能を持ちます。その範囲は東西約156m、南北約132mにおよびます。



僧寺伽藍中枢部 南から



掘立柱堀・築地堀 東から



掘立柱堀柱穴・築地堀版築断面 西から



中枢部区画大溝 南西から



中枢部区画施設のイメージ
(上:堀と大溝・小溝, 中:掘立柱堀, 下:築地堀)



- 凡例
- SA: 塀・柵
 - SB: 礎石建建物・掘立柱建物
 - SI: 竪穴住居・建物
 - SD: 溝
 - SF: 道路
 - SK: 土坑
 - SX: 特殊遺構・性格不明遺構

武蔵国分寺跡発掘調査状況



国指定
史跡

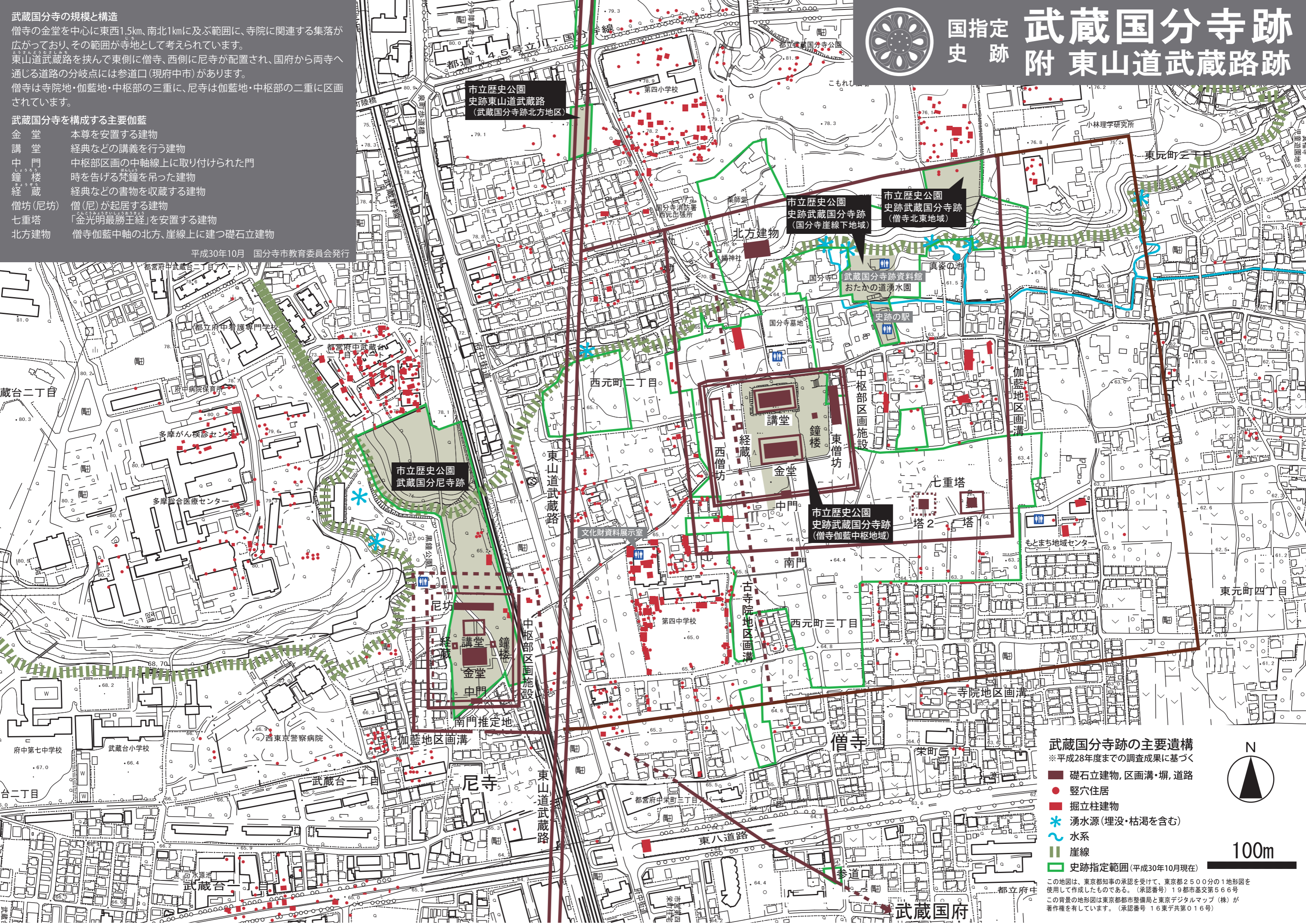
武蔵国分寺跡 附 東山道武蔵路跡

武蔵国分寺の規模と構造
 僧寺の金堂を中心に東西1.5km、南北1kmに及ぶ範囲に、寺院に関連する集落が広がっており、その範囲が寺地として考えられています。
 東山道武蔵路を挟んで東側に僧寺、西側に尼寺が配置され、国府から両寺へ通じる道路の分岐点には参道口（現府中市）があります。
 僧寺は寺院地・伽藍地・中枢部の三重に、尼寺は伽藍地・中枢部の二重に区画されています。

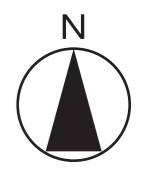
武蔵国分寺を構成する主要伽藍

金堂	本尊を安置する建物
講堂	経典などの講義を行う建物
中門	中枢部区画の中軸線上に取り付けられた門
鐘楼	時を告げる梵鐘を吊った建物
経蔵	経典などの書物を収蔵する建物
僧坊(尼坊)	僧(尼)が起居する建物
七重塔	「金光明最勝王経」を安置する建物
北方建物	僧寺伽藍中軸の北方、崖線上に建つ礎石立建物

平成30年10月 国分寺市教育委員会発行



- 武蔵国分寺跡の主要遺構**
 ※平成28年度までの調査成果に基づく
- 礎石立建物, 区画溝・堀, 道路
 - 竪穴住居
 - 掘立柱建物
 - * 湧水源(埋没・枯渇を含む)
 - ~ 水系
 - || 崖線
 - 史跡指定範囲(平成30年10月現在)



100m

この地図は、東京都知事の承認を受けて、東京都2500分の1地形図を使用して作成したものである。(承認番号)19都市基交第566号
 この背景の地形図は東京都都市整備局と東京デジタルマップ(株)が著作権を有しています。(承認番号)16東字第016号

武蔵国分寺跡全体概略図